SPECIAL FEATURE 特集 1

観測史上最大規模の地震だった
東日本大震災の報道

2011年3月11日、宮城を襲った衝撃。

観測史上最大規模の地震だった東日本大震災の報道

2011年3月11日、午後2時46分、東日本大震災が発生。地震の規模を示すマグニチュードは最終的に9.0、国内観測史上最大であり、世界でも4番目の規模でした。経験したことのない混乱に陥ったのは、新聞社も例外ではありませんでした。

仙台市青葉区に本社を構える河北新報社においても建物が激しく揺れ、平凡なはずだった一日が一変、新聞制作に必要な機器もダメージを受け、自社で新聞を発行できない事態になりました。さらに、支局の津波被害や何日も続く停電・断水も発生し、河北新報社は情報の伝え手であると同時に被災者でもありました。

それでも、この災害を伝えなければならないと、必死に報道に取り組みました。災害協定を結んでいた新潟日報の設備を借り、11日夜に号外を発行。翌日以降も、通信も機能しない混迷した状況の中、被災地の「今」を伝え続けました。

震災から10年を過ぎた現在、当時の報道を改めて振り返ります。

出典：河北新報社　写真：共同通信社

新聞で振り返る

3.11 石巻市

2011.3.17 掲載

沿岸捕鯨基地として栄えた集落は、見る影もなかった。16日午後、牡鹿半島の石巻市鮎川浜に入った。

壊れた道路のアスファルトが、流された家の土台に無造作に転がっている。辛うじて立っている電柱のてっぺん近くに、海に漂っているはずのブイが絡まっていた。

石巻・鮎川 捕鯨基地 見る影なく

「重機が道砕くような音が」

一部施設残る 再開への希望

沿岸捕鯨基地として栄えた集落は、見る影もなかった。16日午後、牡鹿半島の石巻市鮎川浜に入った。

壊れた道路のアスファルトが、流された家の土台に無造作に転がっている。辛うじて立っている電柱のてっぺん近くに、海に漂っているはずのブイが絡まっていた。

「バリバリバリと重機が道を砕くような、すさまじい音がした。」歩いていた女性（70）が津波の猛威を語った。どれだけの人が助かったのか、全く分からないという。

元捕鯨漁船乗組員政巳さん（63）は「この地で生活する気がなくなってしまった」と大船の底を落とした。

町はがれきと化したが、希望は残った。捕鯨船3隻は石巻市内の沖の地区の造船所に係留されていた。損傷を免れた船も、曳航されて牡鹿半島の各港の「角」にその姿を残っていた。

母校ペテラン漁師、奥海良悦さん（68）は「さびをのみ込んだ海を、しっかり見届けて育った。捕鯨は鮎川浜の神行だ。今秋にはミンククジラ漁を再開し、町に元気を取り戻したい」

（鈴間俊作）

津波に襲われた石巻市鮎川浜。金華山行きの乗船場もがれきの山になった＝16日午後3時ごろ